

利根川畠志

五

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



512
32826

利根川圖志卷四

下總 布川 赤松宗旦 義知



印幡沼いんぱんぬま 印幡郡いんぱんぐんあり其水上みなみへ船尾村ふねおのむら神崎橋かみさきばしより落おちやう一方ハ
 佐倉さくらの城山しろやまをめぐりて鹿嶋橋かじまばしより落おちつ下ハ安食やすけより利根川
 小合こがを凡長ひささ七里しちり廣ひろさ二里ふたりに許沼ゆるぬまの中なに佐久さく知ちろ花嶋山
 等らあり其外そと古跡こせき多おほく一佐倉風土記さくらふうどき云倭俗やまと曰い沮澤しそく為沼なりぬま此亦舊ふる曰
 印幡沼いんぱんぬま又曰またい印幡湖いんぱんこ此江也首尾四十餘里有舟楫之便多魚鰕之
 利而下もと引海潮うみうしほ宜言江而或沼或湖者郷語爾故今以江稱焉大江
 千里有歌曰志毛鬪しほむ佐乃伊波能宇羅奈微多豆良之目不那比等
 佐王伎可羅さわぎかり艦かん於須奈李其稱浦者蓋亦尚矣其源出於神船尾之
 西北受二小流一自戸神佐山之間一自神平戸之間流會于船尾
 下廣可一里而東流六七里至師戸會於鹿嶋橋下流而廣可二里

又東少北流七八里而至平賀自此北折彌張大而瀦廣袤十餘里
浸於印幡殖生二郡而北過安食分爲燕尾以入利根川其汎濫之
患常在巽風而未必在潦水爲蓋利根川東南朝海若遭巽風帶雨
則自海口吹上而水逆行溢入于此焉耳江之爲景不宜于平省蘆
荻遮望也宜于登臨矣其登臨者平賀爲佳飯野次之烟收水澄一
鑑萬頃環浦之山如揖如坐如走如駐翠屏畫閣者平賀之望也浩
浩大江一條鎔銀以爲長帶水外綠洲禽飛馬風和斜日而面富士
峯于且千里表者飯野之眺也凡環江村三十餘佐山也神也保品
也青管也先崎也臼井也江原也角來也佐倉也山崎也下根也飯
野也土浮也萩山也飯田也大佐倉也柏木也下方也北須賀也八
代也大竹也酒直也安食也俱連印東而起於乾繞干兒離震以終
于坎焉船尾也松崎也吉田也巖戸也師戸也鎌刈也瀬戸也山田
也平賀也吉高也松蟲也萩原也中根也笠神埜原也卜杭也皆連

印西而起終回繞效印東者焉吉高東可二里江中有二穴一北一
南相違四五十步徑各可五十丈水色深玄底不可測旋渦甚急舳
艫難過村民謂之佐久知穴佐久知鰯魚之小者時集于此穴下網
取之無數故名焉北須賀以北江上夏間陰濕之夜火出水中離水
數尺非漁火非鬼火須臾分散或五六十或百數十若往若來或索
或聚乍遠乍近又高又低以窮數時而滅焉亦江上一奇也
回國雜記標註卷上云九月廿八日稻穗の別當坊ふく湖水と
ながえと 文明十八年丙午也 道興准后

山色湖光殊又窮 鄉書曾不託飛鴻

砧聲近報孤村晚 旅懷何堪憂患躬

又云々小春れあふふやいさゝうのどろふ侍れいみぢ
いふほの湖水あうらびく舟のうちみて酒あと眞行侍りき
富士の祢湖ふうつれる心とふくよむべきよう申されバ





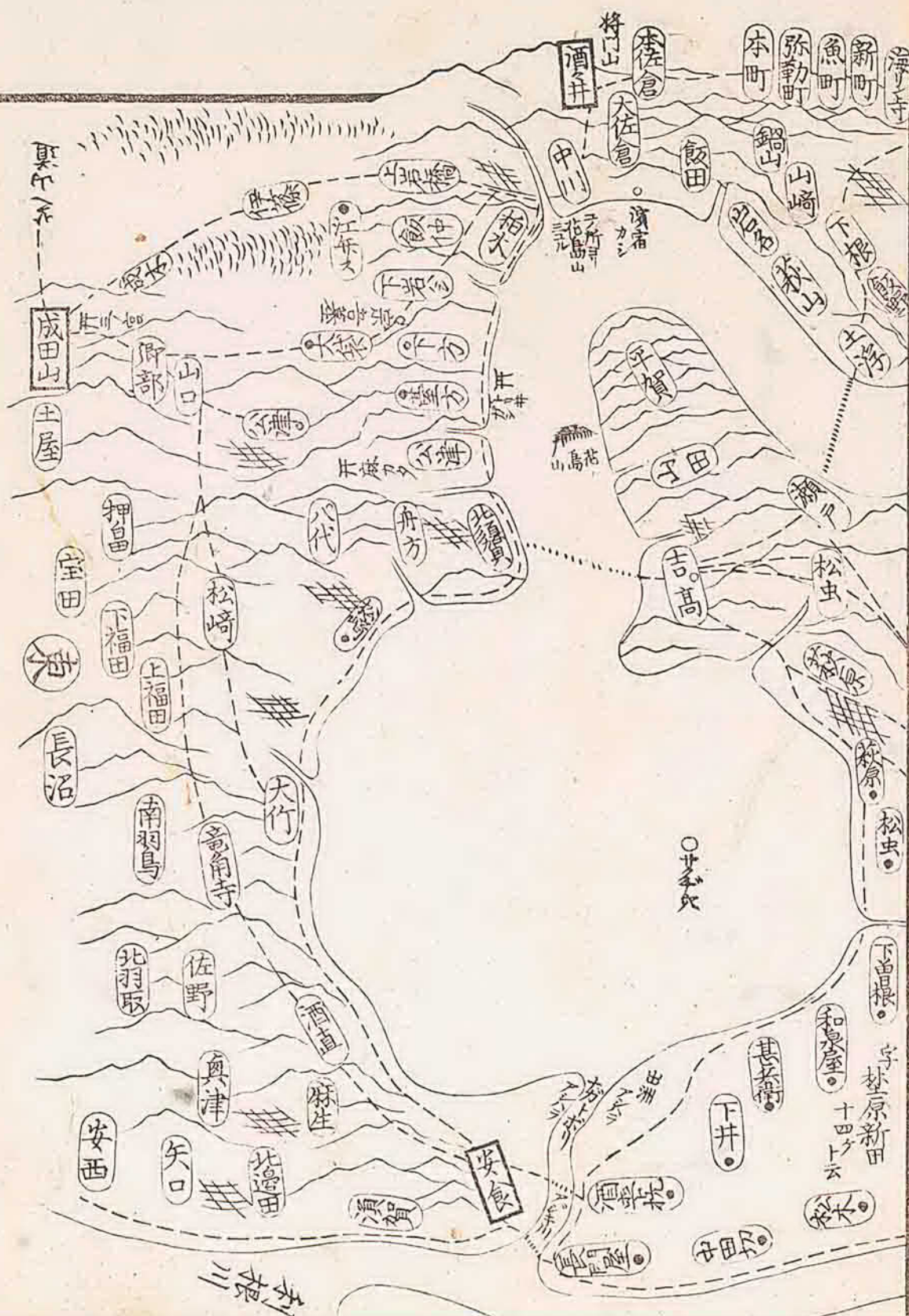
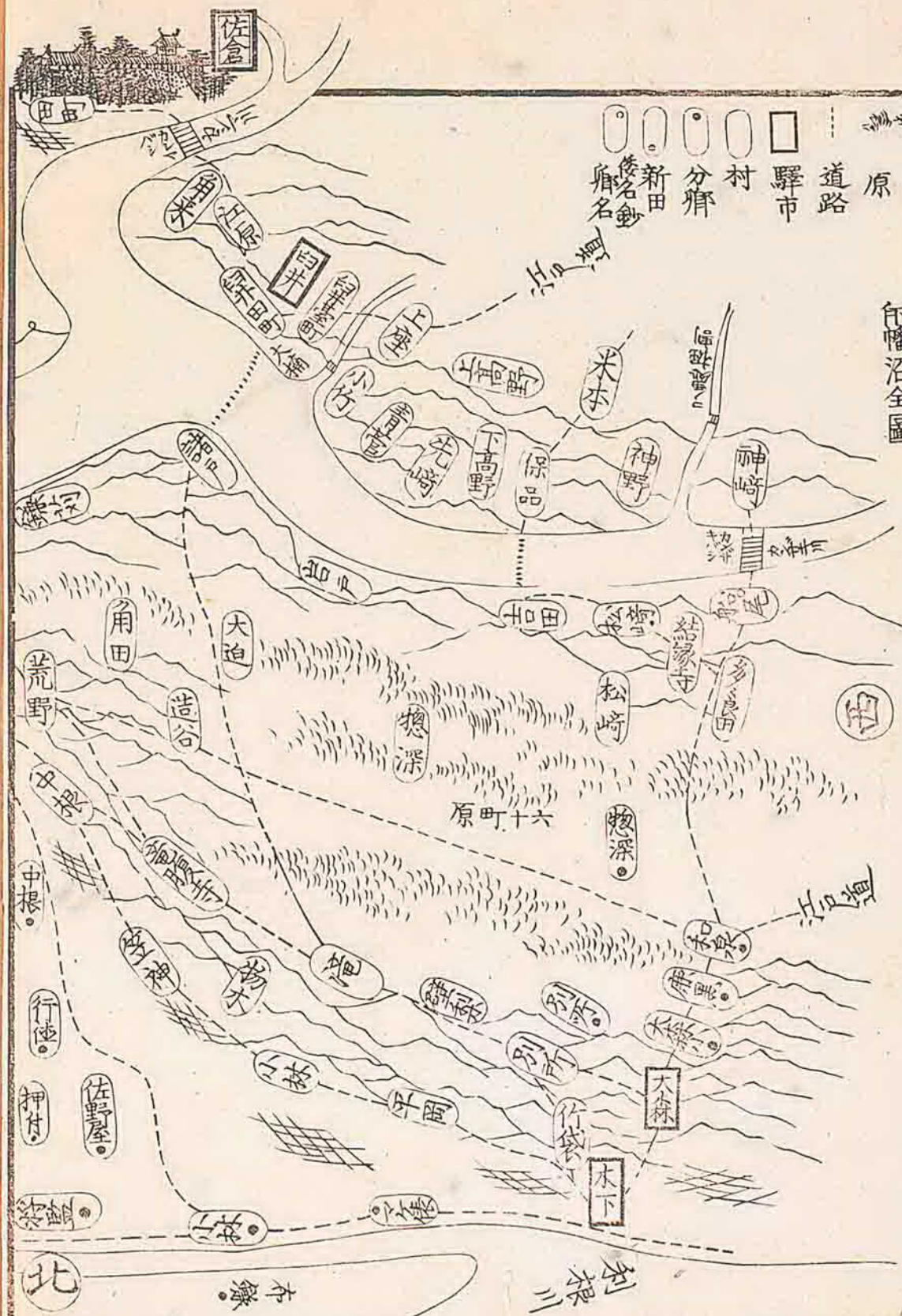








田 原 道 路 驛 市 村 分 瘡 新 田 瘡 名 鈔 瘡 名



箆の内より今捕一イナ十四五斗り取出し細補飾小刀あり板
子の上にて料理せし是を食せし常の魚とハ更うりその
美味ある更いふべし一鉢鯊いとくと直死せしもの一時の向も活置とてけが故か
川辺の者とていづも漁師より生きたる魚を食せし
酒吞あつら漁師のいひくるハ六の佐久知元ハ何処の漁場と
さだめあらねば誰が細打ても宜しけれど手ふれぬものハ
一足の魚もえぐし故ハ手馴しその細打てその一網の魚を
得さるるがもとよりその習ハありと語るときこの者より年々夏に至る
とて死せしより出漁師ふ
れは昼夜のともろをともれど
漁業とてそのあつとつりさて時刻もようーとて漁師一人何とて手
どりそつと舳先の方ふつとり程をうぐひあをを投ぐるふ
魚ハ細の龍頭の所へ真白ふ集りて見ゆれをみて人々踊り
上りて賞賛しぬさてこの一網の魚どのとらね我等ふあたへり
おめれいゝとらとび早速家ふ持ちり数て見しハ一百二
三十斗有し魚の沢山集る更是をぞ知るべし

鳥見ヶ岳

印西萩原村ふあり鳥見大明神の社あり佐倉風土記

云所祭饒速日命相殿神御炊屋姫命味間見命也有永禄中之梁
簡元禄中社司石井氏請吉田兼敬卿奉正一位焉
常陸風土記云鳥見岳是ナリ

松蟲皇女廟

松虫村松蟲寺あり寺門の二王端慶作本尊七佛藥

師如来行基僧正作人皇四十五代聖武皇帝天平年中の御建立
といふ藥師堂の後ろの方ふ松夷皇女の墳ありその側ハ社あり
俚人姫宮と稱せ松夷姫ハ聖武天皇茅三の皇女或ハ宮女とも
云傳ふ癩
と病みてこゝに棄らる自らうりては藥師佛を祈りて愈更
を得ぬ後帝都に還幸して薨し給ふ而して後御骨を當山に
安置せといひ傳ふ

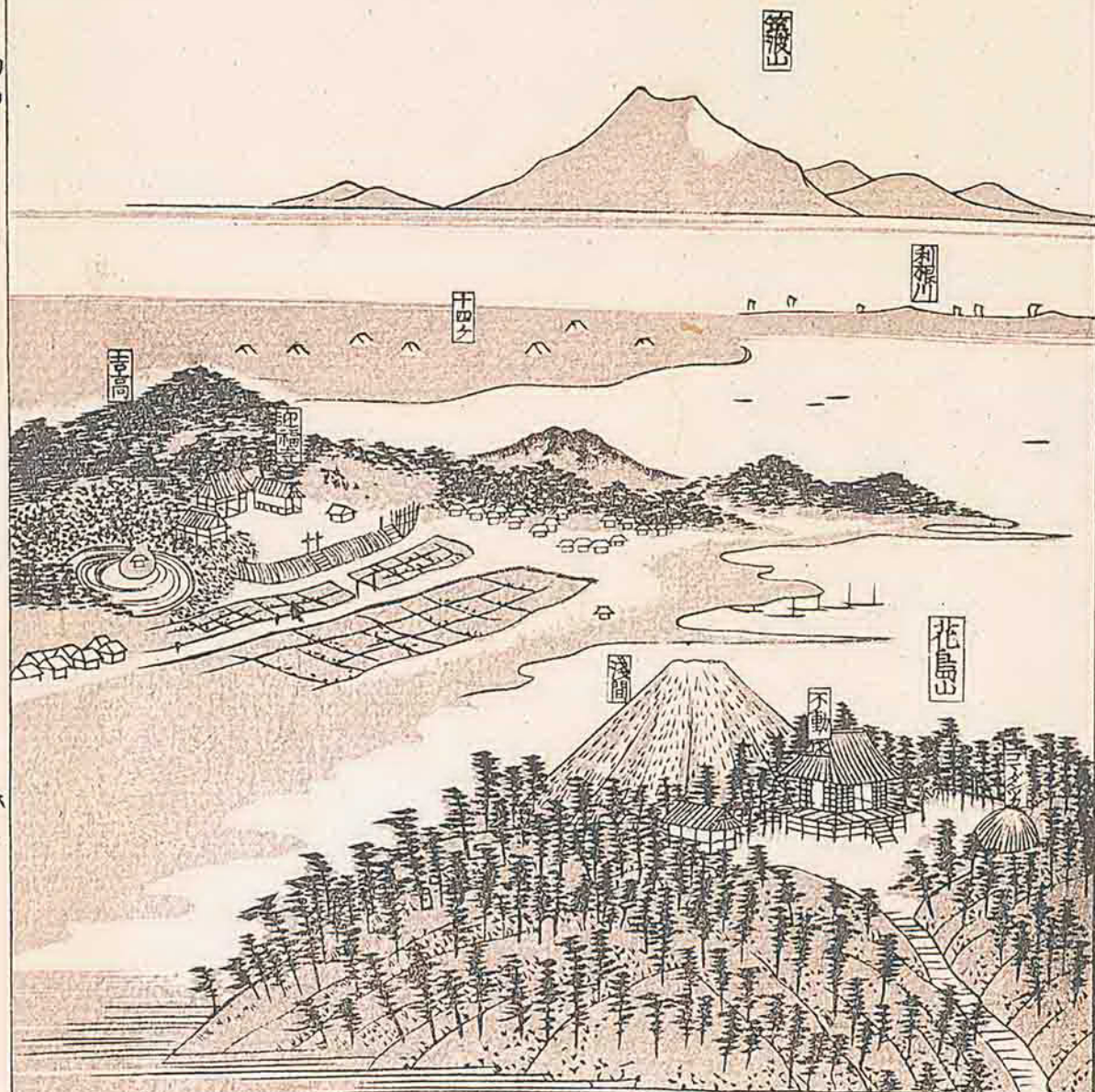
松蟲の陳場

松蟲村野の出口ふあり其ハ常州河内郡足高の城主

岡見中務少輔信貞の長臣栗林下總守義長佐倉の千葉を責ん

印幡沼圖
花島山より筑
波山眺望

二夢
るや
印幡の杜
素丸



と軍勢を催し布川より利根川を渡り布佐の砦へ押への兵
と置笠神小林と戦ひ而して此所を陳せ

常總軍記卷二十云かくて義長兼てハ瀬戸へ出て沼をめんと

出水より佐倉へ押つけ有無の合戦をせべりと号令せしめ

ふ松虫の墓に陳し人あづまりて義長心あづりふ軍氣天文

とらんがみるふ義長大ふ所やと海老原次郎と近付東の方

へゆびさして今佐倉の方へつて一行の赤氣西北に露く

我察せふ千葉勝胤今度義長此道を押来る事を知て道筋を

堅固の要害を構へ當手の勢を平間とらせ日救を経る其内を

引ちうへて香取郡へ打出小見川及び高田松岸を越え利根川

を渡つて常陸へ逆寄せへち斗策此雲瑞に歴然とて去ば此所

小心を迷して香取郡より攻入らるんハ以外の大事成へ

潜ふ兵を引取て高田へ出て敵兵を防へちあて去るがら千葉

佐倉の様子を知り得がごとく細作を出して是をさぐるると雖

ども分明ふら次如何せんと思ふ我今ト筈して是を見るふ

雷澤歸妹の卦也是味方ふより助けの人来るべし中畧

尾張國小河の住人小河左馬次重知といふ者あり彼ハ清和源

氏の正統左馬頭満政の後胤ふして名家の末ありとて尤知謀

を兼備しといふ年若うとて武者修行として関東へ下り

上野下野を経て常陸の水戸ふ有と夫より千葉へ来る其時ハ

千葉も静うあてられバ武をこぐ事も遠ざかり暫く足を

止むべりりたるが千葉の老臣原式部小河を臣下とせんと二

千石を所ふべしと也しが小河が心ふ叶はぬ陪臣と呼まん

亘本國の聞えものありと思ひ是を辞して東海道を上ら

んと思ひたるが岡見の老臣遠藤又右衛門ハ相知る者あり

しうハ今度義長といふ者を軍師として兵を千葉へ出せし

はるへ聞くたとひ遠藤此軍中ふらるるを知る人のよし
あて尋問せざるも残り多しつれ彼陳ふ至らば遠藤が安否
え知るべしと思ひしうバ印西へ渡る斯て義長が陳ふ来りて
遠藤を尋るふ二の手れ大將として此陳ふありきとて小河
大ふらうとび對面してむう今物語せしが遠藤志ばらく
小河を止て義長ふ委細と物語に義長さてハ味方ふ吉瑞有と
見えし小河ふらんと思ひ對面せばと有ききバ小河と辞
さべきふあらねば遠藤と共に義長ふ本陳へ行て謁しきふ
義長ハ小河う姿を見るふ其長六尺餘ふて年末ご三十ふた
らば勇猛英びふき男ふきハ頼もしく思ひ酒ふんとふて後
千葉れふらふと尋るふ小河申るふハ千葉勝胤當時印幡郡
佐倉ふ在城せり斯て其近郷盡く守衛と置たりとて下總香取
郡を鎮下として尤家臣と交へて堅む滑川ふ織田左京助崎ふ

内田信濃寺臺ふ貝室加賀大倉ふ二条大内蔵小見川ふ栗飯原
左衛門小見川越前守千葉東郡ハ一圓ふ東の六郎是又隨一の
連枝ふて強勢の者あて其上六郎大力あらびなく早葉の名
譽荒馬乗ふて大太刀と得たり弓ハ楚の揚由を欺き大剛ふ
て庇をあつけ寔ふ大將の器ある事千葉ふ肩をあづかる者
更ふあし又米の井ハ木村能登吉沼ハ地涌監物長沼ハ大野修
理原坂ハ平外記荒海ふハ荒海左衛門大竹ふ大竹次郎兵衛飯
岡ふ飯岡勘解由馬加ふ馬加七郎船橋ふ布施五郎鷺沼ふ木村
十太夫大須賀ふ大須賀四郎是勝胤が圓城寺ふ村田筑後圓城
寺備前村田臺ふ村田兵衛山部ふ山部八郎左衛門森戸ふハ森
戸五郎宮戸ふ宮本若狹川村ふ川村大炊岩尾崎ふ只越義濃神
崎ふ大和太郎左衛門出水ふ大谷半左衛門藤崎ふ藤崎隼人同
四郎左衛門飯高ふ飯高播磨同十郎鍋木ふ鍋木日向同次郎左

衛門櫻井さくらい小櫻井こさくらい式部しきぶ神大寺かみでら原はら小石上いしのかみ外記げき石橋いしはし小石橋こいしはし大膳だいぜん同
若狹わかつ小石橋こいしはし伊藤いとう平次へいじ左衛門ざえもん同與市郎ともいちろう高井たかい灘なだ小大野おおの弥左衛門やざえもん
門吹上ふきあがり小風間ふうま平右衛門へいざえもん同平十郎へいじゅうろう一分目いちぶ小高野たかの内匠うちしやう二分目にぶ三
分目さんぶ同人どうじんあり。木梨きり小木梨こきり内匠うちしやう同善左衛門ぜんざえもん森本もりもと小森本こもりもと平太夫へいたふ
廣岡ひろおか小廣岡こひろおか縫殿ぬいどの青木あおき小青木こあおき土佐どさ伊能いのう尾お小伊能こいのう尾越前おのえちぜん同勘解かんげ
由よし同四郎どうしろう左衛門ざえもん伊能いのう尾山おのやま小山崎こやまざき主税しゆぜ金田かねだ小金田こかねだ刑部けいぶ神々かみかみ廻まわ
小神々こかみかみ廻丹波まわたんば惣深そうふか小惣深こそうふか六弥むつや林はやし小林こはやし飛彈ひだん鳥井とりい小鳥井ことりい筑後ちくご
同惣右衛門どうそうざえもん其外そのほか藤田ふじた對馬たいま同縫殿どうぬいどの之次のじ武田ぶた允近いんきん芝田しばた宇右衛門うざえもん
久古主斗くこしゆと秋山あきやま内記ないき中野なかの小中野こなかの遠藤えんどう左兵衛さへい布録ふろく小布録こふろく但馬たにま丸岡まるおか
喜き一いち同彦市ひこいち垣生かきう小垣生こかきう大和たいわ迎むか瑳さ小迎こむか瑳さ四郎しろう宇津野うづの又市またいち宮小
四郎しろう同圖書どうとくしやう臼井うすい小臼井こうすい次郎じろう成田なりた小成田こなりた八郎はちろう天野あまの弥太夫やたふ長澤ながさわ
小倉くら入道にゅうだう同次郎どうじろう右衛門ざえもん秋山あきやま藏人くらんじん佐原さはら小水内みづうち八郎はちろう左衛門ざえもん高
橋藤兵衛たかはしとうへい小野傳おのでん八竹川やっしやう圖書とくしやう飯田いひだ新八郎しんはちろう松崎まつざき久内くうち推名おしな小推名こおしな

丹後岡野たんごの内膳澤ないぜんざい田五郎でんごろう左衛門ざえもん高橋たかはし弥八竹やっしやう内兵部うちへいぶ羽川はつがわ四郎しろう左
衛門ざえもん田口でんぐち小田口こでんぐち刑部けいぶ其外そのほかあけてあけて算はかりへ難がた一いち又香取郡かきとぐんの多古たこ
高岡たかおか小舎弟しやてい千葉ちやうへ頼胤よりむねあまあま生實なりみより北きたハ千葉ちやうへの内うち小一こいち老臣らうしん
原式部はらしきぶ在城ざいじやうせりせりまま安食やすけ小ハ松田まつだ藤右衛門とうざえもん大竹おほたけ小大竹こおほたけ平次へいじ
左衛門ざえもん萩原はぎはら小萩原こはぎはら登弥太とみや吉高きちかう小吉高こきちかう代々だいだい吉橋きちはし小吉橋こきちはし中繫なかつづ笹
川さか石見いしけん其外そのほか松岸まつがし本庄もとすだ高田たかた以下いげて其數そのかず五十八城いそはちじやう八十八館やそはちだん
砦とりで九十三餘きゅうじゅうさんよあり然しかるしか小今度こけだ香取郡かきとぐん出張しやうちやうして高田たかたを渡り直わた
不利根川ふりねがわを越こて常陸とくろ小働はたらくべべと評定へうていの候けうなりなりまま此所このところ小
陳ちん一いち給たまはん事こと詮せんふふるべべ一いち若利根川わかしねがわと渡わた一いち常陸とくろへ乱らん入いせバ
脇わきを吹ふとも甲斐かいあるままト今度けだ香取かきと出張しやうちやうの主將しゆしやうハ彼東かのとう六郎ろくろう鎮
胤むねを以もつて惣轄そうかつと一いち二条大蔵にじやうだいざう太夫たふ鳥居とりい筑後ちくご村田むらた兵衛へい次將じしやうと一
て一いち万餘騎まんよかり差到さうたうふふ中畧なかつりやく御評定ごへうていはりていいそき高田たかたへ陳ちんをを
つこれ然しかるべべと哉やと申まをなり。義長ぎぢやう聞きてささるそ有あべべ一いちとれ昨夜さくや

天文を考へ尚^{なほ}と云氣^{うんき}と見^みる小赤氣西北をつらぬく。こま
其さざり也。又ト筮^しせしむる小味方^{さしみ}たをけあるれ卦^{くわ}を得^え
る。是貴客^{ききやく}の物語^{ものがたり}を聞^きべし善卦^{ぜんくわ}あり。今ハ疑^{うたが}へてみやう
小陳^{せうちん}と高田^{たかた}に移^{うつ}りて戦^{いくさ}ふべし 下略

吉高代々城跡^{きちたうだいだいじょうあと} 吉高^{きちたう}あり。掛鼻^{つなはな}といふ山の上あり。東小印幡江^{ひんぱんえ}
を眼^め下^{した}小見^{こみ}おろし風景^{ふうけい}至^{いた}て義^ぎあり。西小御門坂^{ごもんざか}あり。南小家老^{けらう}
内和田屋鋪^{わだやう}あり。云地名^{とこなづな}今猶存^{いままたぞり}を其外口^{そとぐち}と唱^なふ。地名甚多^{とくになづな}
和田口^{わだぐち}南口^{みなぐち}西口^{にしぐち}北口^{きたぐち}丑口^{うしぐち}坂口^{さかぐち}野口^{のぐち}向口^{むかうぐち}向路^{むかうぢ}口^{ぐち}城田口^{じやうでんぐち}殿田口^{でんでんぐち}
向田口^{むかうでんぐち}鷺巻^{ささまき}口^{ぐち}馬草田口^{うまぐさでんぐち}等^らあり。北小船戸^{きたふねど}南小蕪田^{みなわらでん}河岸^{がはん}あり。是
より北須賀^{きたすか}へ安能橋^{あにへはし}へ山田村^{やまだむら}へ行堤^{ゆくづみ}の中程^{なかつら}あり

吉高鮎^{きちたうあし} 名物^{なぶつ}あり。金色^{きんいろ}小^こ骨堅^{ほねかた}。肉^{にく}よりりて味^{あじ}義^ぎあり。ゆきけ
此鮎^{このあし}をとるふ一種^{いっしゆ}の漁業^{りやうぎやう}あり。冬の漁^りづづ一人小舟^{ひとりこふね}小乗^{こじやう}
り。水浅^{みづあさ}き所^{ところ}を掉^ふさしあづから舢舨^{さんぱん}を踏^ふて舟^{ふね}を左右^{さうやう}へ蕩揺^{うたが}をふの

浪音^{なみのと}小おどろきて鮎^{あし}ハ藻^もの根^ね小隠^{こかく}る。その水中^{すいぢゆう}の濁^{にご}るを見て
手^てあて是^{こゝ}を握^{にぎ}こころ。故^{ゆゑ}ふてとる。鮎^{あし}ともいふ。萬葉集^{まんやふしふ}のモブシツ
カブナ是^{こゝ}あり。ツカハ握^{にぎ}

カハボタル 俚言^{りごん}小カハボタルといふ。これあり。亡者^{むしや}の陰火^{いんか}ふ
る由^{よし}。形^{かたち}ち丸くく大^{おほ}さ蹴鞠^{けりまき}の如^{ごと}く。光^{ひかり}りハ螢火^{えいか}の色^{いろ}小似^{こに}たり。夏^{なつ}
秋^{あき}の夜^よあらつる。雨^{あめ}の夜^よへ至^{いた}て多^{おほ}く水^{みづ}上^{うへ}一二尺^{いちにじふ}離^{はな}れていくつも出^で
て遊行^{ぎやうぎやう}をる。如^{ごと}く。或^{ある}ハ聚^{あは}り或^{ある}ハ散^ちト又^{また}ハ高^{たか}く又^{また}ハ低^ひくともある
時^{とき}ハ矢^やのごとく。久雨^{くう}の節^{ふし}ハ夜^よふく多^{おほ}く是^{こゝ}とみる。うゝ花嶋山^{はなじま}
へ龍燈^{りゆうとう}の上^{うへ}ととつり。さく陰火龍燈^{いんかりゆうとう}のたぐひ種々^{しゆしゆ}の書^{かき}ふ多^{おほ}
く見^みゆきと。詳^{しょう}ある。ハ春暉^{はるけ}が見^みあるとく。西遊記^{さいゆうき}ふある。一^{ひと}ある
筑紫^{ちくし}のちらぬ火^かあり。越後國^{えちごのくに}新道村^{しんみちむら}飯塚氏^{いひづかぢ}の咄^{うた}と牧之老人^{まきのらうじん}
雪譜^{ゆきふ}ふ出^でしたる。頸城郡^{のりじやうぐん}米山^{まいやま}の竜燈^{りゆうとう}あり。さく又^{また}ハ一奇説^{いっきせつ}を擧^あぐ。
義和壮^{ぎわさう}年の頃^{ころ}印幡江^{ひんぱんえ}の邊^へと吉高^{きちたう} 和名抄^{わなしょう}ふ云^いふあり。と死頃^{しころ}ハ五

月の未あまに朋友來りて云々。今宵はそらももきて
いと静あれば慰ふ釣に行べーといひたるゆゑ。予も幸の事
ありと思ひ。早速仕度とてのゝ二人連立河岸へ行手なく。小
舟ふうち乗江の半ふ至り朋友の舟と十間をうり隔て掉つと
立舟を繋ぎ釣をたれて居あり。小寂早子刻ともおぼしき
頃俄ふ空より曇。朦朧として物さびしく。程なく大風吹起り。
雨降いた。誠ふちんの闇とあり。十間斗とあるれ居ある朋友
の舟も見えぬ。なりぬ。おひづーと思ふ内。幽ふ遠水中より
一つの青き火閃々と焚あがりぬ。是ふんりの亡者のカボネと
んと見居たるふだん。とどろ方ふ近付來りぬ。逃くうんと思
へとも。風たよなき。バ舟を動かし。事もあらぬ。衣服はぬき。戦
慄さるふ心をまづ。免朋友と呼んと。ききと。更ふ声も出で。何如がハ
せんとなえらふ内。カハボタルへ。とがふねの舳さきふ乗たて

ふ。いふ。いとと思へども。ききやうなく。たゞ目をとらて。心
ふ念佛さる。のく。あま。暫く。雨や。風えちと静まりぬれ。ハハ
いぐと目張開き。えらふ。やカハボタルハ何處へう消う。せ空
え少。晴て朋友の舟えとの處ふ居あり。これと。た。と。え。こ
え。と。い。ご。今のカハボタル。残見。やと間へ。我もみなれ共
おそろ。さ。小物も云。い。と。答ふ。やうく。人心地付て。早々我家
ふ。う。り。來りぬ。翌朝漁師とも大勢居たる所。あて右の咄。をく
ろく。物語せ。小獵師ども云々。い。其くらぬの事。い。度々の
更ふり。我ハ一昨夜漁ふ出。小彼カハボタル。我う舟ふ乗たり
其時ハ大勢ゆゑ。おそろ。と思。い。舟掉を以て。から。小任せ
打。あ。さ。一。所。碎け散て。舟一面。ふ火と。あ。と。塗付。ある。如く。その
鯉さ。支壁。ふ。座。き。物。ふ。其。質。油。れ。如く。阿膠。の。如く。ぬ。ふ。む。り
く。と。し。て。落。で。み。あ。く。打。寄。り。やうく。と。洗。ひ。落。ぬ。と。大勢の

物語なり。又其内一人の云々。四五年以前の事あるがとき
或夜投網うら此艦漕ふ出所彼カハボタルつくともふく
出来り舟近くふつくと飛来ぐる。網とりへ剛氣の男ゆゑ此時
小声あて我ふさとりを射て我もうあづさながら舟浅廻ら
うのカハボタル浅追うけあひす。網とりへあざと小脇ふ引ら
う。舟の舳さうふ突立あがり。手頃と見さるゑと我々と網浅
投うきば按ふたがう。カハボタル一ツ浅打めせぬ。其時え
腥き臭いもん方あく。網の中へ一面ふ青れた火とあり。ぬるく
て落次。つめんどもささやうなく手ふてえみ洗ひぬ。其手二三日
え腥かき。故一昨夜も大勢あて舟浅洗ひーが我ハ以前あり
て居ゆゑと云次手浅付さうーとつひと大笑ひぬ。うのか
ハボタルとつふえれを生捕てその形質浅あらへる。ハ印播
江の獵師あへー

花嶋山

印播江の中ふあへ。平賀村ふ属を。俗談。離島。相違。むろー

此島へ舟あて渡り。由云傳ふきど。今ハ田畑とあれり。島の廻り
一里とつり。此絶頂ふむろー寺あり。大日本寺とつふ。今ハ不
動堂と籠り堂の二残り。弘法大師護摩修行の古跡あり。とて
護摩檀塚。獨鉈水。東の方山のなと。今ふ存在せり。山ふ十六峯ハ
谷ありと云。さて此山ふ登き。西ハ富士南ハ佐倉の城山
将門山東ふ當りて。成田山北を望め。筑波日光の山々。と北須
賀村水神の洲。寄ハ江の半ハ蛾眉をふ。往来の高瀬船ハ白帆
旗揚て。八方ふ乗ちがへ。數萬の魚舟ハ柳葉汁ちらさる。あとか
千勝万景應接する。ふ遑あらば。誠ハ北總第一の勝地あるべし
湖ハ波り多。ハ蕎麥の花。梅麿

兩祈。文政初の頃。印西の邊ふ名をト童と呼。禪宗の僧あり。年十
九歳ありとつり。元來何きの弟子ふ有るん。とふ漂泊。來り

て二三年ふ成ぬ。其性^{うま}のつゝて愚鈍^{ぐどん}なり。常^{つね}に道路^{どうろ}に嘯^う吟^{ぎん}し宿^{やど}を
需^{もと}めず。樹^き下^{した}祠堂^{じどう}を栖^{すま}とす。三伏^{さんぷく}の暑^{あつ}月^{げつ}より綿^{わた}入^{いれ}ぬのこと着^きて暑^{あつ}
とせぬ。蚤^{ひら}蚊^{ぶん}といと半^{はん}。嚴冬^{げんとう}素雪^{そせつ}の寒^ふき夜^よも草^{くさ}物^{もの}ふ半^{はん}天^{てん}一衣^い充^み府^ふの破^{やぶ}
き衣^いに常^{つね}に腰^{こし}ふまどひて放^{はな}さむ食^くを與^{あた}ふるふ二碗^{にばん}の外^{のう}を食^く
りて二碗^{にばん}食^くて後^{のち}はいりある。珍^う味^みを出^いせとも更^{さら}に手^てふども
取^とらぬ。酒宴^{しゅえん}の席^{せき}を嫌^{きら}ひ又^{また}小童^{しょうどう}壯年^{さうねん}のその代^{しろ}ぢらふ煙草^{えんそう}ふ
火藥^{かやく}を交^{まじ}せ食物^{しょくぶつ}ふ蕃^{ばん}椒^かを混^まじ^へて戲^{あそ}ふ。是^{こゝ}とあたへ困^{くる}あまゝむる
が故^{ゆゑ}なりとぞ。飲食^{おんじ}の外^{のう}一物^{いっぶつ}をも乞^こへざる。實^{じつ}に愚直^{ぐちく}の者と
云^いべし。或^{ある}年の夏^{なつ}此^{こゝ}あり大旱^{たいかん}して利根川^{りこんがわ}を初^{はつ}め所^{ところ}々の江沼^{えぬま}
も渇^{かわ}水^{みづ}高瀬^{こうせ}船^{ふね}の通^{とほ}路^ろも絶^たえ井^いの水^{みづ}はさて國民^{こくみん}の憂^{うれ}へ大^{おほ}うた
あゝ是^{こゝ}に依^よて地頭領主^{ぢとうりやうしゅ}とせし諸寺^{しよし}諸山^{しよさん}ふ仰^{おほ}せて祈^{いの}らせられ
村^{むら}々の農民^{のうみん}も種^{くさ}々の事^{こと}をふして雲^{うみ}あるるが其^{その}驗^{けん}ふし時^{とき}ふり
れト童^{どう}云^いなるは印幡江^{いんぱんえ}の中^{なか}ある佐久知^{さくち}穴^{あな}ふ竜神^{りゆうじん}住^{すま}むこと。是^{こゝ}に

を頼^{たの}み祈^{いの}とふに忽^{たち}ち雨降^{あめふ}る。早^{はや}々^々基^{もと}を作りてえさせよと云^い。
所^{ところ}の者^{もの}ども大^{おほ}く笑^{わら}ひ。この魯鈍^{ろどん}あるを食坊主^{しきばうしゅ}何事^{なんじ}ぞ知^しる。
る虚言^{うそ}と申^{まを}出^でし人の心^{こゝろ}を欺^{あや}ふと叱^しりる。れバツヤ
疑^{うた}ふまふる。我^{われ}數年^{すねん}の竜神^{りゆうじん}と友^{とも}たり。依^よて竜神^{りゆうじん}とたのむの
法^{はふ}ぞ知^しる。と更^{さら}に聞^{きこ}え。此^{こゝ}事^{こと}強^{しやう}て望^{のぞ}むなれば所^{ところ}の者^{もの}共^{とも}え
長^{なが}々の早魃^{はやて}あて困^{くる}ト果^{はた}たるをりあるべし。彼^{かれ}が意^いに任^{まか}せ
とてト童^{どう}が言^{こと}葉^はふ隨^{したが}ひ。佐久知^{さくち}穴^{あな}の傍^{はた}ら江^えの中^{なか}ら基^{もと}ぞ作^{つく}り
てあたへぬ。ト童^{どう}是^{こゝ}に注^{しゆ}連^{れん}と張^はり四方^{しやうほう}に青^{あお}白^{しろ}赤^{あか}黒^{くろ}の幣^{へい}ぞ建^た種^{くさ}
々の物^{もの}を備^{そな}へ。とト童^{どう}の臺^{たい}ふより突^つ立^たあが。と高^{たか}声^{こゑ}ふ云^いなるハ、
此^{こゝ}度^{たび}天災^{てんさい}大旱^{たいかん}あて國民^{こくみん}の飢渴^{きかく}見^みるに忍^{しの}びぬ。是^{こゝ}に依^よて愚僧^{ぐそう}
ト童^{どう}一七日^{いちにち}の間^{あいだ}飲食^{おんじ}ぞ断^{こと}禁^{げん}し佐久知^{さくち}穴^{あな}の竜神^{りゆうじん}に祈^{いの}る。希^{まれ}くハ
大^{おほ}雨^{あめ}と下^{くだ}し衆^{しゆ}人の飢渴^{きかく}を救^{きう}へ。志^し多^たよ。若^も七日^{しちにち}ふ及^{およ}んで雨降^{あめふ}ら
むん。バ愚僧^{ぐそう}再^{また}び生^なて歸^{かへ}らぬ。佐久知^{さくち}穴^{あな}へ身^みぞ投^なげト竜神^{りゆうじん}の栖^{すま}ぞ

穢さんと云早てどつうと座—そのとも云う座禪の躰ふぞ
見えふらる。所の者共是より欺むらると思ひ居たるがこの
誓文哉聞より大に驚き皆々あんどくら—てゐたなり。諸
童雪哉初老—より々々七日ふ及びなれどもあ—ええん
くをばト童が死る日あまきと皆く案ト煩る所のト童へ國の憂
民の苦難哉救へんと命を懸ての祈るあまきバその至誠の感ふ
や有らん其日午刻より俄に黒雲舞起り雨降出—追々篠をばく如く車
軸を流—てふふふらなれば所れこの共大に悦び長ぐの飢渴の苦
—今一時ふ藕生—なる心地ありと踊り上つてよろこびあへり。
夫よりりのト童へ何をく恩賞をべきと相談せ—元より無
欲の僧ふ—て金錢へ手ふたも取らず二碗の食を乞のこふて
心ふ望くるこふ—あれはまきやうふく斯てト童へ五七日
た草物一衣ふ麻の衣と謝しありとば。此邊を漂流せ—がそれより何地へ行るらん曾て眼ふ掛ら
ず所のども甚たき哉奇ありと—て疑はざるものへあへり

アミ

瀬戸渡

土浮瀬戸

の間あり佐倉風土記ふ水上三百九十丈と有

同書関宿路の條ふ在佐倉乾驛十佐倉至瀬戸八里此間有土浮

施至木下六里木下至布川六里此間有利根川布川至小文間登

印西産物

箭蔵茯苓所古在馬先以巨鯨初草類所出種

松露所味出春二三月間松陰土壤生之狀如彈丸外褐色内香

否松露二種あり米松露と云ハ色白く—て柔ふとやう栗松

露といハ色黄荒と帶て堅—是下品あり又二十年以前までハ

猪鹿兔ふと甚た多うり—近年一足そこところとふ—

師戸渡 師戸臼井の間あり佐倉風土記ふ水上三百九十丈と有

えたり

巖戸壘 岩戸村ふあり佐倉風土記云距佐倉西北八里—丁岩戸

五郎胤安居之志津胤氏攻之家族皆死後頻有鬼哭燐火之怪白

井圓應寺僧誦經止之因建寺今西福寺即是而其堂前紅梅則記
胤安父子及妻所自殺處云東國戰記所謂岩戸城主岩戸五郎與

吉田渡 吉田より保品へ渡り米本茅田と經大和田新田

源賴政塚 結縁寺村にあり佐倉風土記云傳治兼之亂賴政敗死

于山城宇治遺命於其家士唱競二人曰負吾頭牽吾馬向東國去

吾欲止處當重必座其地期以五旬過期而無驗則乘之二十奉囑

東行二十日而至此覺甚重遂座封之植狗骨樹且建堂二十六俱為

僧居此既而馬斃埋之栽櫻號名馬墳又有雜墳在桑橋臺里許

此亦賴政所畜來此而漬云按唱競東去不見于平家物語盛衰記

等但賴政首座于下總劔古河在口碑而事似此所傳然不審孰是

焉更有一說賴政弟深栖三郎光重其子陵助賴重共居下總九郎

義經小年來此俟金賣橋次而往陸奥國事見于平治物語而橋次

所寄之佛具在隣村瀧村瀧水寺又近村中根濱印播江處有橋次

兄弟墳而傳其為盜所殺則賴重之居必在此邊今日御所柵者蓋

近是焉所謂墓及堂似於賴重之所建恐後人彼此附會為之說耳

併記意見以俟重得明徵矣

柳晴天山結縁寺ハ人皇四十五代聖武天皇神龜年中行基僧正

の草創と云本堂南向六間四面本尊阿彌陀佛ハ行基僧正の作

側ハ金像の不動尊を安置云御丈二尺餘嘉元元年九月十五日願主權律師龍尊と云

鑄あり新義直言曰井實藏院末寺あり境内ハ花井戸扇の芝あ

る鐘出現の池ハ本堂の向ハあり一説ハ其後治兼の兵亂ハ源

三位賴政平家の為ハ生害ハ從臣下總國の住人下河邊村藤三

郎清恒と云者御首を肩來レ此所ハ葬り奉り剃髪一々一字殘

建給仕ハなまふといふ

賴政塚本堂より辰巳の方
三斗斗山の上ハ有

名馬塚本堂より未の方二斗斗ハあり櫻の
大木有テ道路ハ覆

結縁寺村
結縁寺并
頼政卿の墓



入定塚

本堂の側あり傳伊勢國住人佐藤民部といふ者の娘頼政公の墓と尋ね此所に入定と云石碑大比

頼政石塔

本堂より在り少く真の方あり高四尺余五輪あり文字磨減して不令云傳ふ正保の頃井上筑後侯建ら

昔此寺ふ六坊あり今其地名残り安養坊 住持坊

山中坊 龍本坊 大仙坊 鷺見坊 古く檢本坊と云由治兼の頃斯改といふ

天正の頃當山焼失して寺寶縁起残らば灰燼とといふ

又云此里へ往古京都の官流飯岡豊後守尊經といふもの天平年中此里ふ來り開發せし地也と云飯岡家今猶存す

神寄橋

印幡郡船尾村より千葉郡佐山村へ架を印幡江に此所ありて盡橋より上へ高瀬船通せど是より利根川落口安食まで七里佐倉の鹿嶋橋まで四里半といふ

是印南

平戸橋

平戸神村の間ふ架を是より檢見川海迄掘割開發

天明五乙巳年四月の古繪圖ふ平戸橋より檢見川海まで掘割

長九千六百廿六間四尺五寸床六間深三尺より六丈三尺七寸

まで新開反別三千百十三町五反一步余と見ゆふ多田沼侍従

の此事を與りて堀め給ひぬきと終ふ事ふらばして止ぬ

其後ふ天保十四癸卯年水野侯五家の大名ふ令て七月廿

三日より鉄初て堀めきと事ふらばして同閏九月二十

三日ふ止り

米本城跡

米本村ふあり佐倉風土記云距佐倉西南三十里一六丁

村上氏世據之永禄元年三月十三日城主民部大輔綱清自殺而

城廢焉

村上綱清墓

米本の長福寺ふあり綱清ハ民部大輔あり天文弘

治の間米本の城主たり永禄元年三月十三日自殺を同書

臼井城跡 臼井宿の臺ふあゑ。佐倉より一里餘西北の方あり予
一日臼井ある大川源五右工門書成の許を訪ひて臼井の城跡
を問ふ書成筆をとりて今の有様を圖して予に示す則ち是を
北齋に縮図あきめてたふ出さす同所四應寺に傳ふ舊
記を見せしる用を摘て爰ふ出さ

臼井元祖傳

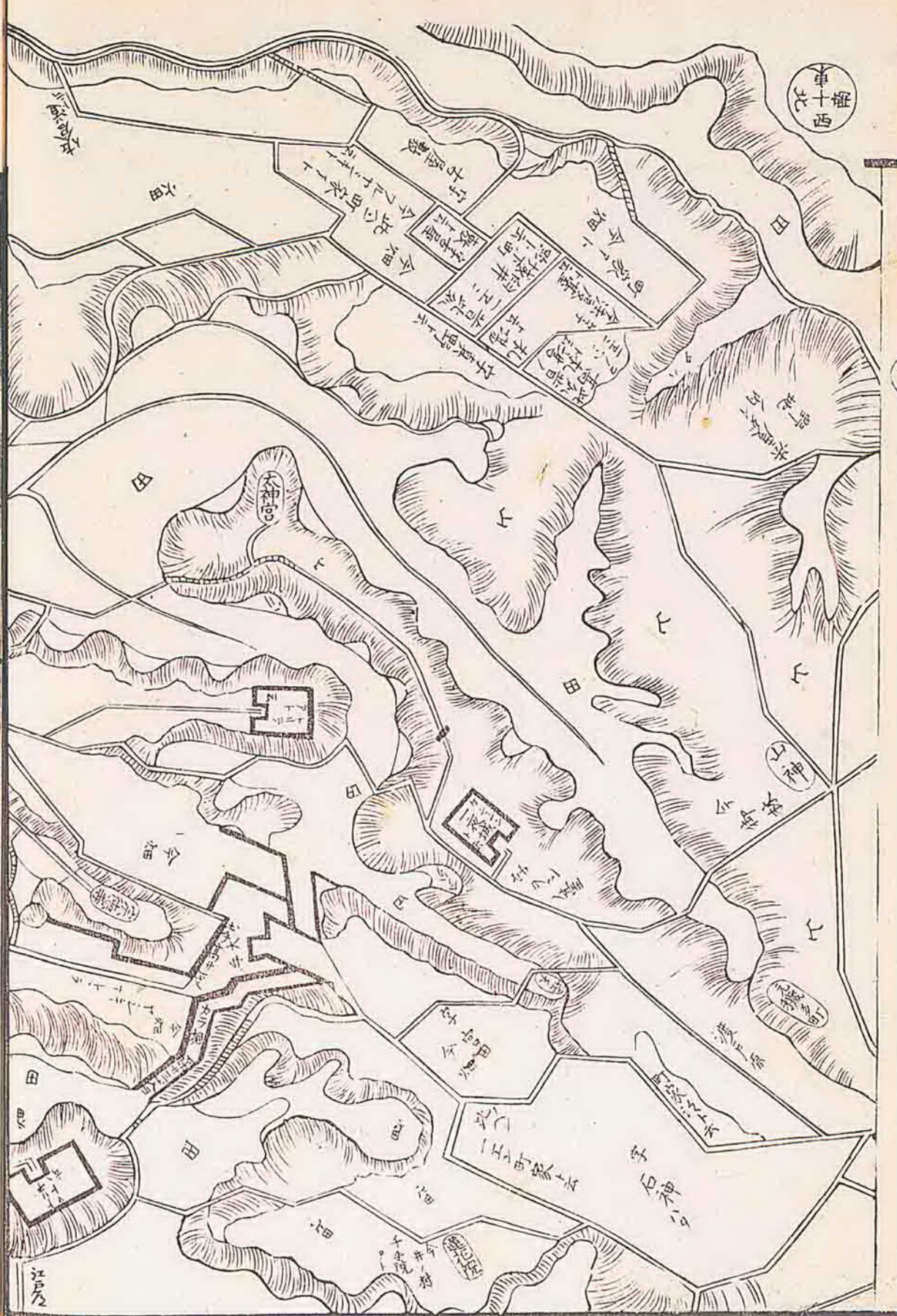
千葉公常兼分付三男常康于數箇之庄園角來、飯重、井郷、羽鳥、龜
津、上座、小竹、井野、青黄、先崎爲臼井城主因之號臼井六郎次子千
葉公上總公之大族也此臼井城也者前廣野渺々後湖水漫漫左
右谷廣而深山繚而曲其雖盡人力豈如是堅固哉有利自守無使
敵攻南望生谷之保貝松呈千年瑞北顧印幡波傳萬歲之響城
郭周匝三里餘印西隔水一里許誠是名城也勝地也常康奉仕于
賴朝公有勲功賴朝公爲大庭敗軍憑千葉到下總常胤將一族以

相從時常康嫡子常忠太郎孫子與一等平騎兵三百與常胤同相從
爾來前爲追討平家粉骨于西海爲征伐泰衡碎身于東國常胤有
大功於賴朝公偏是一族合スル力故也賴朝公於常胤其愛敬世之所
知也其恩顧不淺故餘威遍親族但恨雖其有功勞者一被書千葉一
族而不見記各自之名義譽不遠聞芳邑無久傳自常康至祐胤四郎
凡五世相續爲臼井城主奉仕于將軍家者也

臼井正統中絶記

正和三年秋祐胤不幸テ病醫治失術禱祝無驗八月七日卒去歲
僅二十五唯有一息號竹若丸生年三歲祐胤遺言曰竹若丸成長
之間胤氏祐胤之弟也爲志津城主カクマテ之行法令憐士撫民須如我
在且胤氏始雖守兄之遺命欲情已生義心忽亡味過一歲私謀殺
竹若丸自爲臼井城主家臣有岩戸五郎胤安岩戸村名有印五郎
堅側聞之已欲殺前夜自爲山伏之形藏竹若丸篋中潛逃去當此

西
北
十
里



古城圖
大川源君門
書成製

本丸ヨリ
北齋縮圖

子 沼向 三丁 師戸 廿丁
丑 鎌 一里 土浮 一里
寅 飯野 廿五丁
卯 飯重 廿五丁
辰 佐倉 一里余
巳 飯重 廿五丁
午 生谷 廿丁 千葉 四里半
未 下志津 廿五丁
申 上志津 一里
酉 上座 十八丁
戌 小竹 十三丁
亥 吉田 一里半 松崎 二里

戌亥ノ方
沼ノ上也
平戸橋迄二里半

印膳沼

時胤安禱爾于妙見菩薩願其無恙胤安載致于小舟自棹湖水歸
岩戶然後又潛出岩戶奔歸倉直詣于建長寺偏賴佛國禪師約成
長之後令之爲僧禪師具聞其由愛憐養育如父於子漸長而後禪
師不欲令之爲僧是出於恤孤之有實遂使之元服號左近行胤時
告訴基時貞時等欲令歸本領之地雖然天未命歟事終不成禪師
示寂預謂弟子佛真禪師曰願續我志扶持行胤因其遺教佛真禪
師亦恩顧厚不異佛國禪師行胤嘗辛味若送春迎秋空終二十餘
年至此時歷世之文書皆亡累代之珍器悉失是如爲孤且過禍故
也

臼井中興記

建武二年秋足利尊氏奉詔追討時行下向于關東相戰十餘度時
行敗北不知所之其後尊氏兵威重壓八州關東之武士皆屬之尊
氏自稱征夷大將軍奏討義貞義貞亦奏尊氏有逆心依之京都邊

騷動時佛真禪師與行胤相議曰尊氏卿者必主天下之器也此度
相從以抽軍忠可達著錦帟之望於是行胤將精兵五騎而屬于尊
氏卿其費用咸出于建長寺一山與佛真師之扶助且自首途日於
建長寺一山縉侶相集每朝誦尊勝陀羅尼百遍以祈行胤有戰功
而還本領地其功德豈徒然乎然後延元元年二月尊氏卿攝易豐
嶋合戰失利敗走赴于筑紫菊池武俊率九品之兵於筑前國多々
羅濱與尊氏卿對陳尊氏卿曰敵軍衆而強我兵寡而疲自運命今
日已窮矣於是行胤以爲吾拔戰功遂素志正當今日戰場也不是
因神力何能之乎敬念我家守護神且禱之宇佐八幡及宰府天神
自誓曰若功不成則使我速戰死生而何爲主從六騎直先登大破
菊池軍其勢絕比倫所謂如以礮投卵豈是人爲實知神助菊池敗
比而後九州怕其兵威悉屬于尊氏卿其感悅不少乃約行胤云我
脫今日之危難偏在行胤之忠功後來天下歸掌中日再歸本領地

謝之其誓約不可變也天下已定之後曆應元年秋尊氏卿舉行亂
任從五位下行左近將監為臼井城主歸賜世所領之地且有可改
行亂為興亂之嚴命言是取再興廢家之義也又命千葉公貞胤曰
速可使胤氏志津退去而守為臣之禮義嗚呼天運無不復興胤再
為臼井城主其昌榮又如昔時謂之臼井中興也

圓應寺草創記并八幡宮天神祠造營

興胤再為臼井城主而後自心以為我中興之功成者元是佛國禪
師之撫育佛真禪師之扶助也其恩之不可忘也不唯是我永至子
孫亦猶可追憶於是招請佛真禪師住持于豆州國清寺以為閑山
新立精舍山號瑞湖寺名圓應且寄附領地十之一興胤事佛真禪
師恰如子之於父晨省昏定所謂能竭其力者也寺與城隔一池為
之橋使其往來有使也又預自心期我若生子以其長先為僧嗣法
佛真禪師併是欲謝恩之有餘也道菴和尚傳云興胤之長子曆應二年已卯十月二十四日誕生

少為僧法嗣佛真禪師為圓應寺
弟二世道菴和尚則是也

加馬多々羅濱戰功偏因神助故

奉勸請宇佐八幡宮及宰府天神于臼井長致報賽八幡宮有城南
其山号八幡山其寺号滿藏寺以為別當令掌神事八月十五日有
祭禮也興胤初相地于此時自以所携之楠樹枝植地曰若此楠樹
活而生葉以為靈神來格之證然後其樹繁茂碩今神前有是嗚呼
其妙不可測也又於城中草創管神祠修葺妙見堂以八月二十五
日祭管神以七月二十二日祭妙見自致如在之禮矣想夫興胤之
為人其誠能感二神其勇忽挫三軍幸雖為中興之祖自處富貴
長記為郎當之身佗恤寒饑大抵以數件支平生之志行其可祭也
此外舊記雖多○諸国主齊錄下總田禪宗小千石 印端縣臼井御 圓應寺

大楠樹 右古城跡の内西北の隅ふあゝ側ふ山王權現を祭る楠の
周圍五大餘さう東の方へ九尺斗り隔てめづる一丈をうりあゝ二
本あり枝の根付たる物ありと云り其奇ある支図と見て知べし

白井
大樟圖
周圍五天餘
東方一天餘



むうー此樟のまといふ大蛇住て折々人を捕食ふ何人の退治
たりけん其大蛇の皮ありとて方二三尺斗ふて鱗ハ四文銭程
ある哉同所の寶藏寺傳へ持り予を見はなしく尋ひて如何
たりけん近頃ハ見せむと云り

大田圖書墓 臼井圓應寺の西古城跡ふあり舊記云備前守俊胤
前爲臼井城主時文明十一年巳亥正月十八日太田道灌_{城主}將
二階堂七黨等一萬餘騎兵渡市川來臼井圍城俊胤預聞知之故
設備侍馬千葉公孝胤引援兵來共守之道灌良將也俊胤亦良將
也彼此盡計畧攻守爭戰_ヲ相戰十餘度勝敗未決春過秋來長尾
之麾下數國之武士來共援守七月十五日大戰道灌之兵伏尸數
百_{オト}第太田圖書戰死道灌_{オト}悅力攻軍失利敗北_{太田圖書墓有臼井}
_{地也里民有疾疫則祈之無不}自是俊胤聲名高世間威風奮於國
_{應夫生有勇力者死有神カ}中者也

おとつる 古城跡より東南の方一町斗あるまで田の中ふ石の

小祠あり_{古ハ此邊と云}里人おとつるの咳の出る人ふ

此祠ふ焦椒とお茶と奉りて祈念をまへば奇妙に治るといへり

その故ハ正和三年當城主臼井祐胤八月七日不幸ふて病死

其十五子息竹若丸僅ふ三歳祐胤の弟胤_{志津}氏遺言ふとつて

竹若丸の後見とある胤氏始め兄の遺言を守るといふとも

忽ち逆心と生れ私ふ竹若丸を殺してむづくら臼井の城主と

あらん事を謀るあふおとつる下女ありやうも此

吏を知りて岩戸五郎胤安_{印西岩戸}の城主告ぐ胤安大ふ驚き自ら

山伏の姿ふつくり竹若丸と笈の中ふ藏へ潜ふ逃きて鎌倉ふ

去り建長寺佛國禪師ふ養育を頼み生長の後本領の地ふ歸ら

るめんと欲すのち足利尊氏ふ属して本領安堵せし臼井丸近

將監興胤といひいあふ竹若丸の吏ありさて臼井の城あてい

下女のおたつ後見胤氏の密謀我岩戸五郎不告たる支頭へれ
一ゆゑ胤氏大に怒り己ふあつて殺さんとけあつて危くも
その場どのがき私小城をぬけ出印幡江のありある芦原の
中へ隠る胤氏あつと追うけ捜し求むまとも曾てあきげ此時
あつて誤て咳と志さつて胤氏不見付らき直小首と討き
一とあり里人甚く是とあひまき其所へ石の祠を建てあきと
あつてあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
念願りあふまきこやう也といふ

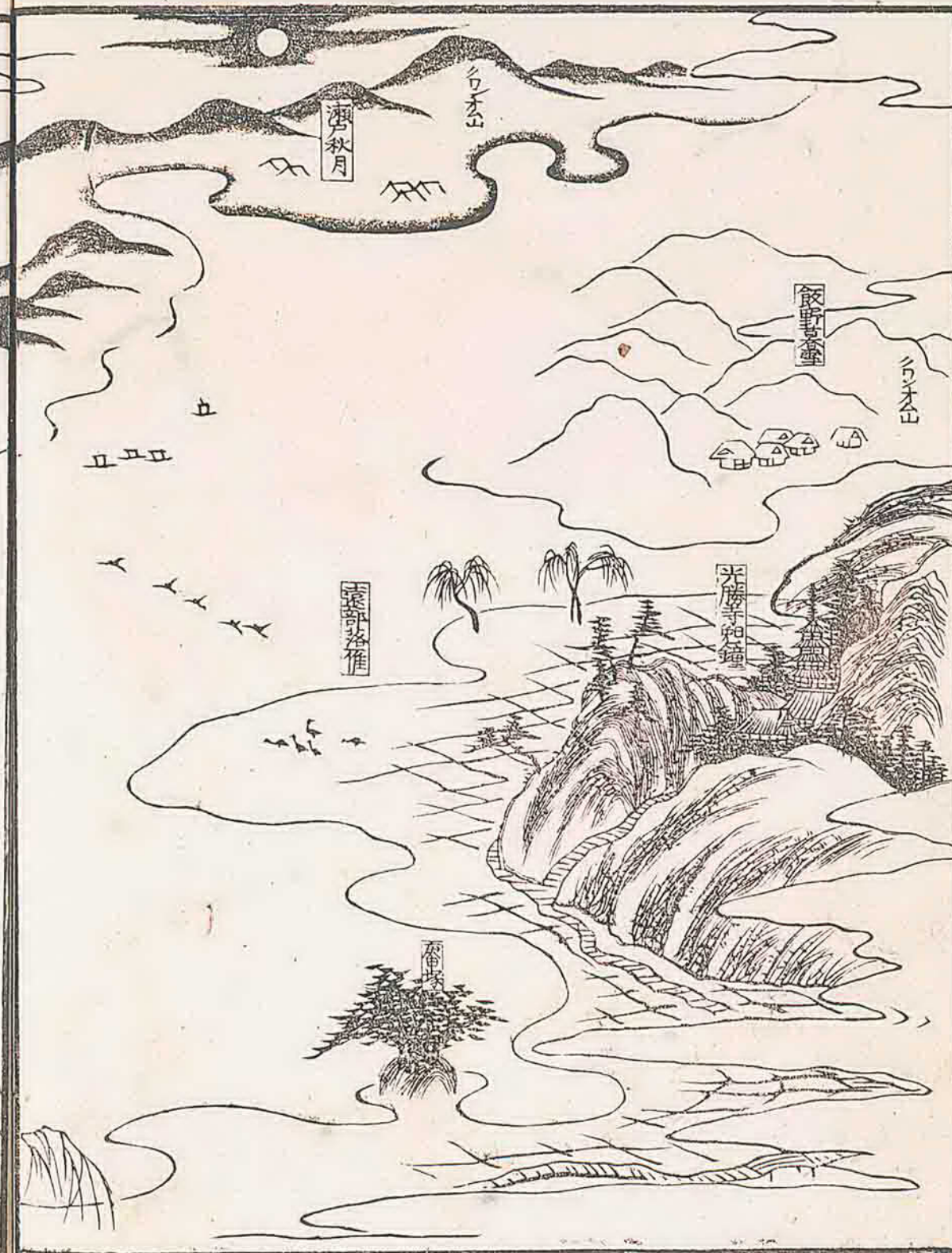
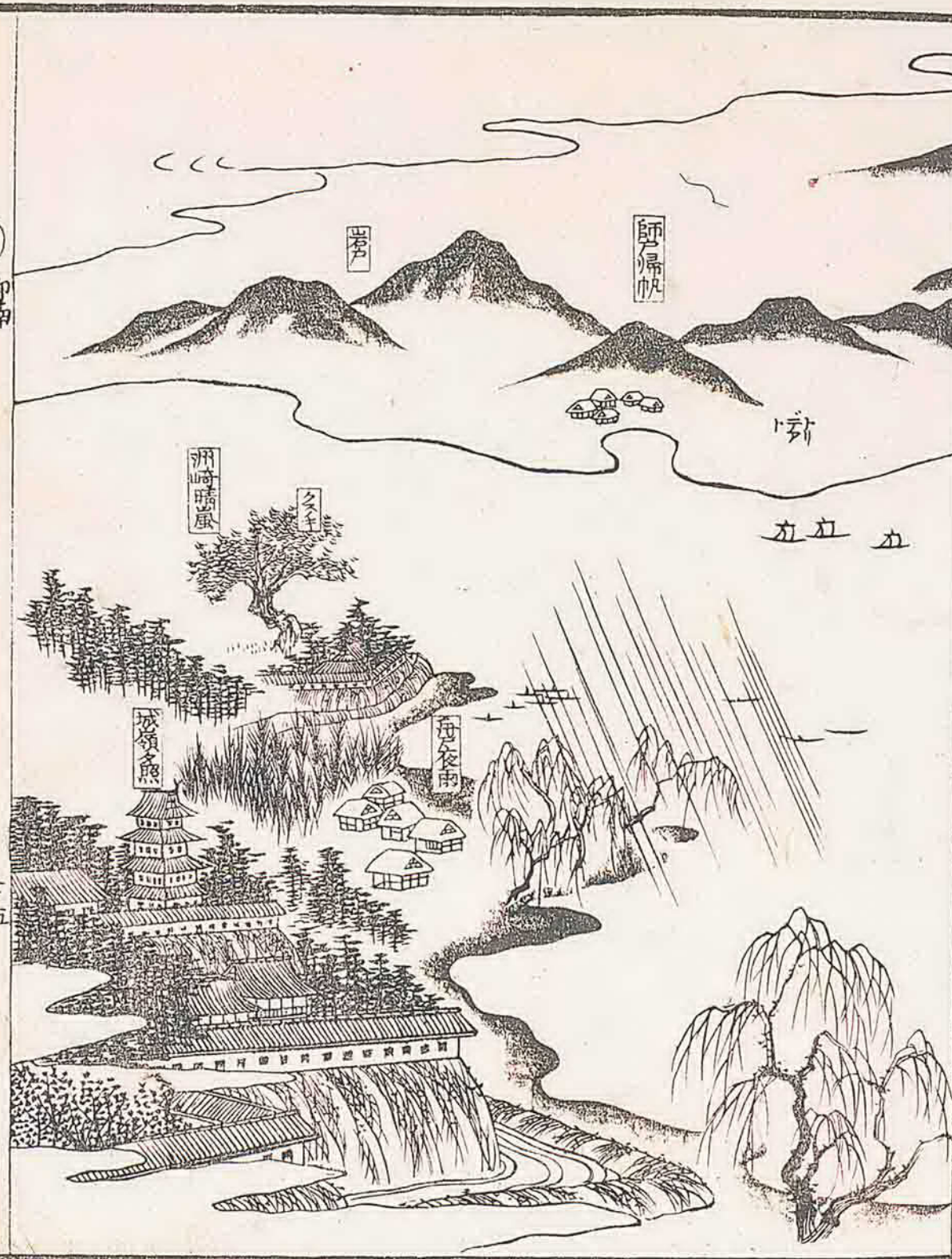
臼井八景 并序

下總國臼井郷瑞湖山圓應禪寺者中興城主平行胤有故所草創
之精舎也境地靈景色絶後負古城喬木脩竹園遶前抱湖水閑鷗
浴鳧浮游晴好雨奇之有餘日涉夜遊不飽若試謂之趣東望飯野
霽雪西映舊基夕陽浮萍斷金玉流瀨戸挂影晴嵐吹瑟琴響洲崎

松聲光勝疎鐘報暮諸戸片帆促飯沙平水淺旅雁下遠部秋夜靜
雨暝漁翁繫舟戸岸如馬春待花木曙隻納竹隈涼遷喬鳥各嶺蟬
秋愛楓林酒冬和樵路之歌曠野蛩寒汀鷺大凡四時之佳興一日
之眺望變態萬千不遑枚舉者也僕投老于寺前濯懷于湖水已五
年于茲矣寺之僧的公者方外舊識也乘興共消日於吟境訪寂復
終夜燈前同遣世之樂大且無窮公常恨言此多景地無詩人之詩
無歌人之歌者何其闕乎若不補之風流之罪也歟於是遂賦八景
以示之一唱則如坐夫勝地信所謂有聲之畫也後見此什人不可
無詩不可無歌公曰請亦題之見義豈默止漫綴詩歌以附佳作
之後自顧東施顰也竊要鉶蝦蟹一啖不可食者以釣金鱗所願在
焉時

元禄十一年十一月晦日

臼井隱士 信齋 叙



舟戸夜雨

宋的

夜雨蕭々舟戸天。深泥封路接平田。青燈耿々漁窓外。幾許浴鳬喧水邊。

信齋

遠部落鴈

宋的

乱行飛雁落田疇。蘆葉半凋遠部秋。貪了稻粱欲充饒。沙頭倦翼且踟躕。

飯野暮雪

宋的

一丘突兀氣蕭森。冬嶺青松半落陰。瓊屑紛紛裹日暮。玉龍忽見偃波心。

師戸歸帆

宋的

物り様々暮れ夕部張るぬくふわ〜〜の〜あとのをりや

布帆一幅泛清灣。萬頃煙波往亦還。潭面風休如鑄鏡。影含翠黛清前山。

信齋

瀬戸秋月

そら人のたゞれ波にゆきあのやのふろ〜〜そら〜〜れ

晴湖漂影月如流。殘漏惜光人倚樓。瀬戸清風今夜景。吹教我嘯洞庭秋。

城嶺夕照

宋的

空見平湖與橫峰。昔年層閣總無蹤。孤城返照紅將歛。近市浮烟翠且重。

信齋

光勝晚鐘

以く夕部入り夕嶺ふ〜〜らんむ〜〜をきくあれ〜古跡
一遍宗風已儼然。星霜五百有餘年。鐘聲遙響孤雲外。知是稱名落

洲崎晴嵐

跋

元祿戊寅之冬

盲龜子

爲之跣

鹿嶋橋

物井川 佐倉風土記云。在印幡郡二源皆出。上總國一八一自野呂來登。

田谷當北流十餘里而至坂戸一自吉倉來歷大谷流用草七曲巖

富西流十餘里而至坂戸二水相會入馬渡橋下又西北流六里爲

物井川出于小名木細流過鹿渡亦會于此而北流三里至羽鳥又

與高崎川會遂北流於城西過鹿嶋橋六七里而入印播江

高崎川 同書云二源一出於文違高松之間西流過下勝田橋下十

許里。歷高崎南，一出立沢，南西流過飯積橋下，坤流十餘里。過高崎山。

北_ニ水會_ニ于高崎西_ニ又西流過_ニ高岡_一歷_ニ真田橋_一下_ニ流_ニ于城南會_ニ于物

井川俱入江

佐倉 印播郡あり。入口小鹿嶋橋あり。橋を渡りて田町小入る。田

町の中程右の方より田町御門へ也。海隣寺坂城上までハ海隣寺并

木小至る此所武家町あり。横町より左へ曲り新町有町弥勒町
本町本佐倉町とへて酒々井小至る。是より中川伐過て成田小
達也

佐倉風土記云城在印播郡之中而稍近西嶋山其爲形勢居高
陽驛濕阻要屏翳足乎遠邇面卯背酉左右子午前置市廛曰田町
曰新町曰彌勒町曰本町曰本佐倉町曰酒々井町是曰佐倉六町
農賈相雜民庶安堵上至京師八百有八里距江戶七十九里東南至
二里西北至下野國界五十四里同文略昔千葉介平常胤より輔
瀧二至ル迄代々居千葉輔瀧城ヲ佐倉郷將門山ニ移ス其後胤
富相鹿嶋山之要阨使邦胤移城于此築營未成邦胤卒其子重胤
幼冲天正十八年與北條氏共敗于相模國小田原城
東照大神祖賞鹿嶋山之形勝遂命利勝井城之慶長十六年春正
月十一日興功七年而成矣名佐倉城云

諸國圭齊錄下總國時宗部小三十石 印播郡佐倉郷 又三十石

同郡同郷 清光寺と見えり

土産 佐倉炭 葛藟 三度粟 蕨 初葦 松露

野駒

本佐倉 城趾あり今の佐倉小對一本佐倉といふ佐倉風土記小

千葉介輔瀧千葉より城伐佐倉郷將門山小移とありて注小

在、今、城、東、六、里、と見えり 東照大神祖廢將門山城文祿元

年封武田信吉于此建館於本佐倉大堀居之云と見えり其後

慶長十六年鹿嶋山倉城小興功七年小て成の後大堀も廢せ

一ありと見えり今本佐倉小續て大堀濱宿大佐倉御廨ふとあり

諸國圭齊錄下總國曹洞宗部小二十石 印播郡大佐倉郷 勝胤寺

新義真言小二十石 同郡大佐倉郷 寶珠院と見えたり

將門大明神 將門山ふあり平將門と祀る故小社と以て山の名

と云、石の鳥居あり銘を刻して曰 奉寄進將門山大明神石

華表右兼應三 甲午天十一月日總劔印播郡佐倉城主從五位下

堀田上野介紀朝臣正信持と見申例年八月三日祭禮相摸あり

稻荷藤兵衛 佐倉より一里餘り東の方墨村の百姓ふもあの男

常小狐とどる事不妙と得あり故ふたうう藤兵衛といふ物類

荷の二字と音ふとふへてとらうと稱ふふ故小稲藤兵衛常小

自分居屋鋪の裏ふブツチメ仕わけ也我梅らへ置此所へはき

来りて捕と云ある時用支ありて常弱水戸へ往一帰とあるを

けの原ふて狐ふ出逢一故あの狐を欺一誘して我が家へつき

歸り裏山のブツチメふわけて捕とあり此道法十里ありう

在てその内ふ舟渡三ヶ所ありといへりう或日藤兵衛千葉

野と通じたる時狐ふ出逢一故欺一來てブツチメふ懸んと

ふたり古狐ゆゑ中く平安くわらば一兩日過てうの狐

隣家の忤ふ化て夜半のところ藤兵衛が家來と表の戸を叩き

藤兵衛くブツチメへ狐がかつあるもやう起よくと云

と懸とふつたり狐のわくる處さやうある欺一あるとひひ

とて偶然と寢て仕舞う翼朝藤兵衛が云うる夜辺隣の

忤ブツチメふわたり行て見べといひける故家内の者

起いで至り見るふ大ある古狐一疋かゝ居たりとあり

藤兵衛めざうふとありの忤と狐ありとう或村ふ狐多く

さとり即智のあいさり誠ふ名人と云べう或村ふ狐多く

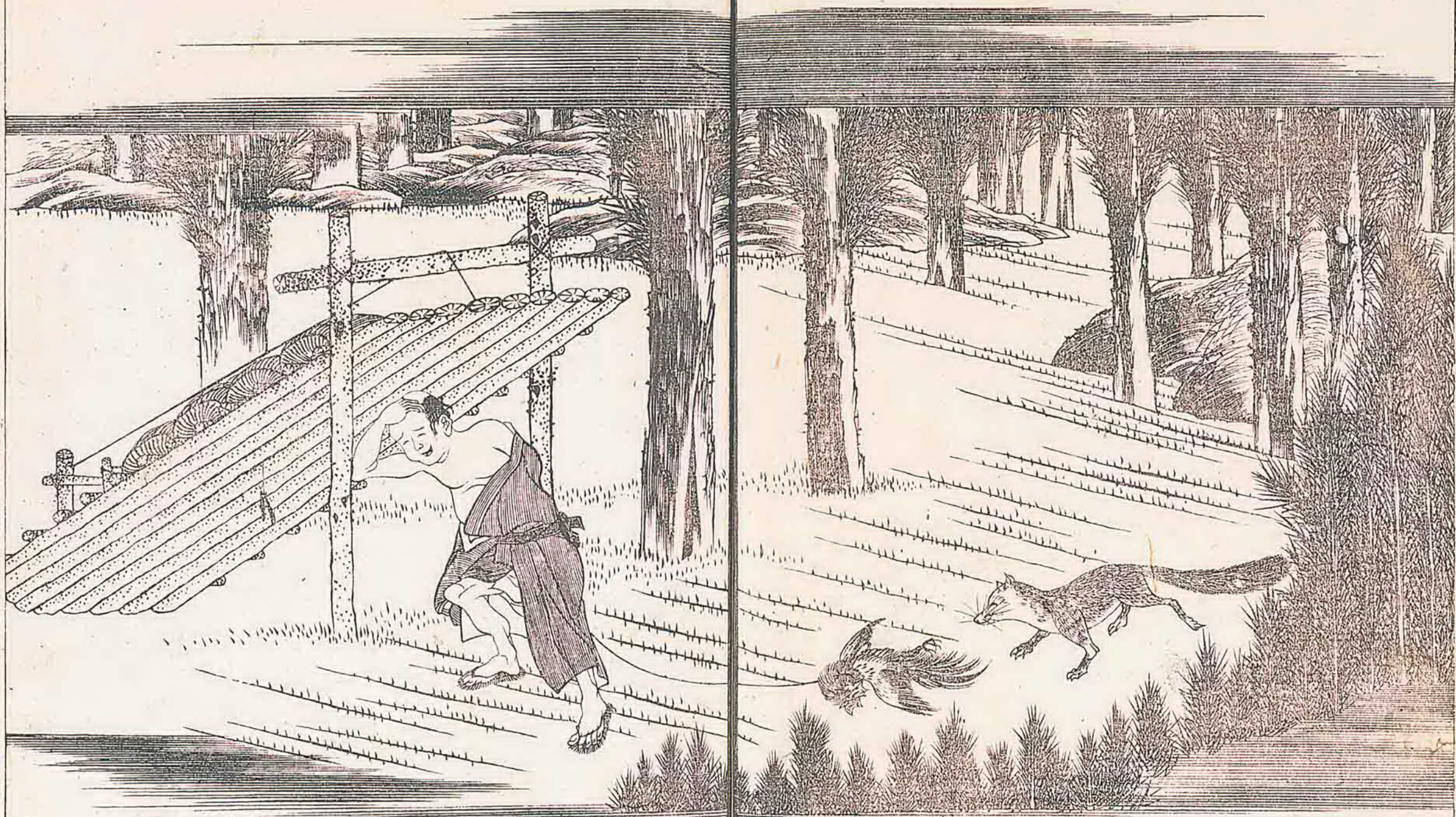
住て人家の鶏ふと捕り食ふゆゑ村内の若者ども相談して

の藤兵衛をたのみ来り狐を捕る所見とさう望とけきば

と心安さるありあの狐さ仕方へ捕て見を處とてうづ

地蔵堂の庭の隅ふブツチメを仕つけ置我ハ山ふ到り此所へ

狐と連来りてとる故各々ハ此堂の内あて見物をべと表ふ



竹のまなきとさげ。大勢この内小隠居たり。藤兵衛へやぐて
支度とてのへて山ふ入。酒小酔とる声色あて大声あげ。さつ孫
へおらぬ。狐ヤーイたうりふちやめとあひとや。あど、
さんぐ。ふ呼りりふぐら山中残多ぐりありくふ。程あく藤兵
衛。狐をつれ大酔の身ぶりあてうの堂の前小出来りぬ。腰小二尋
をかりれ縄とつけ。その先小鶏の死とあると結ひ付ようく
くとして引どりありく。狐ハ是と捕らんとて後ふあり前
ふあり欠まへるをぐて藤兵衛懐よりびまを落と。六大切の
物と落しと。うちくあやうめうぬふ食きてはあるをのう。う
はくはるるうい。ふとくむとり言して。うれおはめと捨ひふ
から終ふたふき卧たり。狐ハそろく。やばへより。捨ひ残し
おめ残とり食ひ。又後の方へ廻りてうの鶏と曳く。藤兵衛目
残覚し。足とあげて是と追ふ。かくさる支度々あり。狐ハ悩きて

側のブツチメ小近よりふはらくやうとを伺ひ散々とふりて
這入幾度も白ひとうご終ふ餅とくハへて横とひ小飛つとて
其柏子小刎木とつきてブツチメふりぬ。其自由あるふと實
小座舗の猫と嘲喚とるう如し。予藤兵工小逢し時餅ハ何ふ
哉と尋とさハ鼠の油揚ありといくり。然るや

佐倉の儒臣窪田某狐藤兵工の傳あり云。城之東墨村有獵者名、
藤兵工。善捕狐。人呼曰稻荷屋。稻荷司穀神也。或謂神即狐也。或謂
狐神所使。故謂狐亦曰稻荷。以藤兵工捕狐。又轉曰稻荷屋。云。稻荷
屋。取狐。不施置。罕不持。予銳。爲製大板方丈餘。設覆數所。巨石如其
上。以助其重。而少開其端。支以小柱。繫柱以繩。繫繩以餅。狐來食餅
繩動。柱仆。從而覆落焉。以是狐多。歷死。又時持餅遠出。誘而所之。嘗
夜出。有邑小吏山崎由良治者。繼至焉。大叱藤兵工曰。藤兵工汝農
而不爲農。好害生數。且狐性靈過於人。狐不覺害若。復害狐。如此而

不止得殃不少矣。言畢而去。藤兵工惶伏謝罪。既而思之。曰。余之出也。則以夜至也。則深山。非人可至。乃豈老魅誑余乎。因往來談。把所特餅投之。若有就而食者。大喜。且投。且行。既至覆所。則吏死于覆中久矣。藤爲帶。双扶在腰。而形已爲狐。尾曳脩々也。由良治爲吏。威信行於民。故孤化其形。籍其威。以遏其害已也。於是藤兵工名聞乎近鄉。數里間野無枉之跡矣。

窪田子曰。藤兵工之事。可謂佐矣。然此余之所親聞見。而可信者。藤兵工嘗云。城中多狐。使我掩殺數日。則積屍如山。快哉言也。夫城狐社。崩人之所共惡。而不能去者。何也。彼其所託城社也。所負人主也。負人主之威。而託城社之固。以行其盪魅妖誑之術。雖有猛獒。將垂尾聽命之不暇矣。尚安得而除之哉。然則藤兵工最爲之將如何。曰。餌而誘而殺之而已矣。

酒井町

佐倉六町の内あり佐倉明細記小天正十九年辛卯年酒

酒井町建御入国初メテ、取立町ナレハ末久ク榮ユルヤウニ可仕旨 兩御所様ヨリ大久保重兵工へ仰付ラル、間酒々

井篠田大隅其外年寄共へ下サレ、證文狀有之 中略 船著毛先

年ハ濱宿御湊ナリケル處新堀舟戸御取立下サレタリ 下略

佐倉風土記云 慶長中酒々井北開渠引印播江而著舟於酒々井

南三十里寒川並連而在海畔此泛海西南五十里達江戶最爲捷馬一太櫻濱達佐倉東六里泛印播江北十八里而至利根川而左所之過木下歷関宿南折沿市川入海而達江戶馬右從流而下者歷滑川金江津神崎佐原小見川而至鉤子入東海又右則過上總而通安房武藏左則通於常陸陸奥

中川 佐倉風土記云出自印播郡尾上乾流而十里過中川而入印

播江此處より印播江花鳥山と云

大佛頂寺 岩橋村小あり創造の年時詳あり弘法大師大佛頂

の法と修する處ありといふ諸國圭齊録下總国新義真言部云十石 下岩橋村大佛頂寺といふ

野馬取

救ヶ所あり其日小當りてハ遠近の老若男女郡集

見物也。佐倉風土記云駒野駒爲良家駒次之其野駒在坰南者自
千葉野以東至根古名北者酒酒井以東至寺臺曠原縱衡各三四
十里風牧于所々官籍其牝牡消息之數皆有厲禁歲之六月吏來
取之其執之處謂之込字書無此字倭俗用此爲押入之込凡七處
曰内野曰高野曰柳澤曰取香傳古之摺墨曰小間古曰矢作曰油
掛是也毎込三四十步四圍築防傍関二門及時列卒呼噪牧士數
騎驅逆之或百或數十以聚一所而納諸込乃官吏監臨命牧士簡
擇毛物不可者驅出之可者留之一人竿頭繫繩纏駒首又一人躍
上駒背急抱其頸仆之執之盡其込而止矣牧士數十人散居村々
三度栗栗也書同此栗一年ふ三度實をむすぶ故ふ三度栗云又冬春原野有之樹不高子亦小春生夏華秋實冬和新苺之蓋第
栗栗也書同此栗一年ふ三度實をむすぶ故ふ三度栗云又冬春の間野を焼時落栗自やける是をやけ栗と云尤爲珍

成田山新勝寺

埴生郡成田村不在不動明王二童子を祀る弘

法大師の御作ふして始ハ山城國高雄山神護國祚寺護摩堂の

本尊あり故ふ靈驗甚多く世ふ知る所あり昔朱雀天皇天慶二

年相馬將門亂を起し時廣澤遍照寺の寛朝僧正ふ命し調伏

の法を修せしむ乃この尊像を奉持し難波津より海ふ浮び將

門が新都に程近きこの處ふ在て調伏の護摩を修せしむバ感

應忽ふ顯れて明る三年の二月將門終ふ伏誅せりこの後僧正

尊像を奉りて歸洛せむとするふ忽重くして擧ぐる事能ハす

且靈夢の告あるを以て永くこの地ふ留む乃勅して伽藍を建

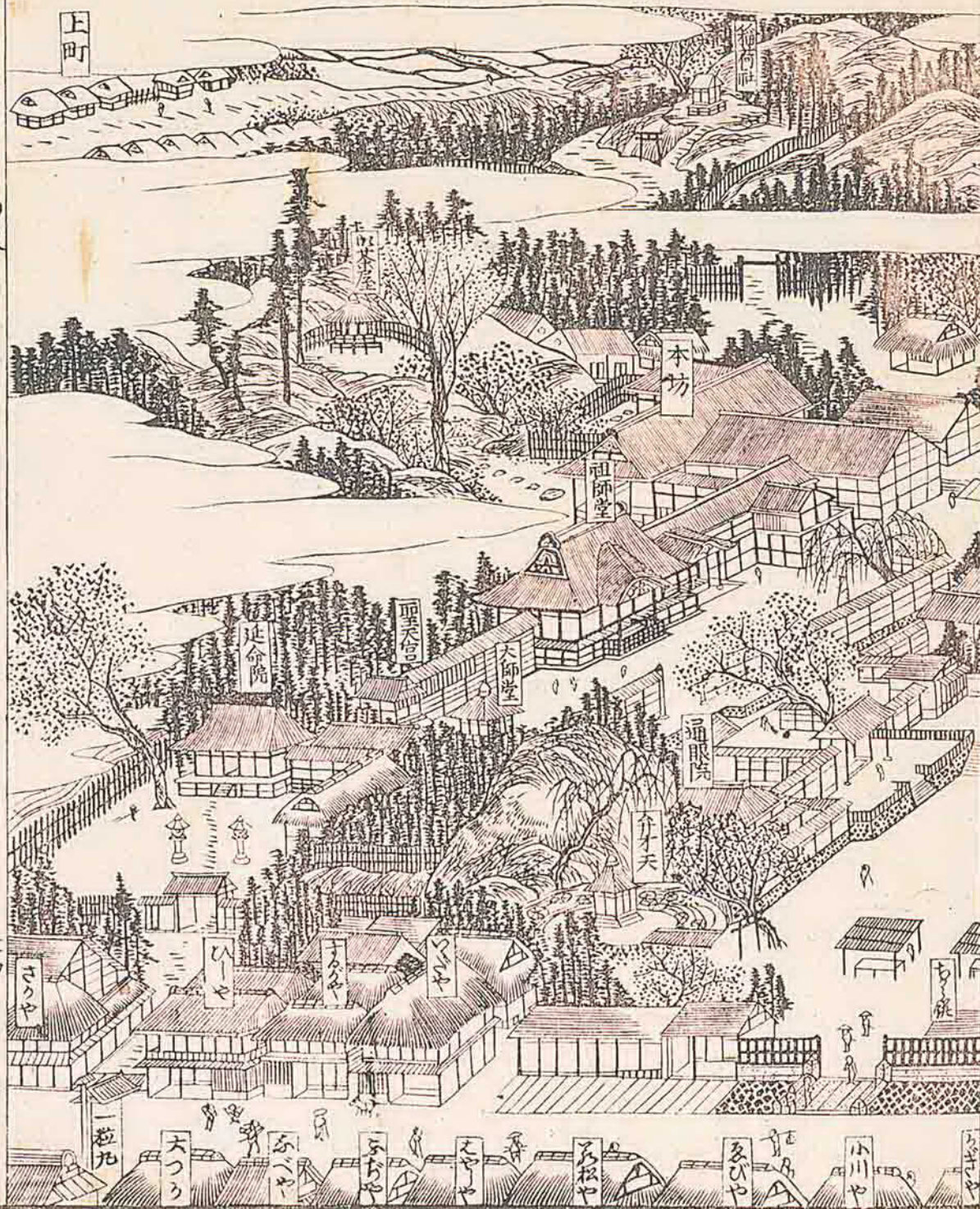
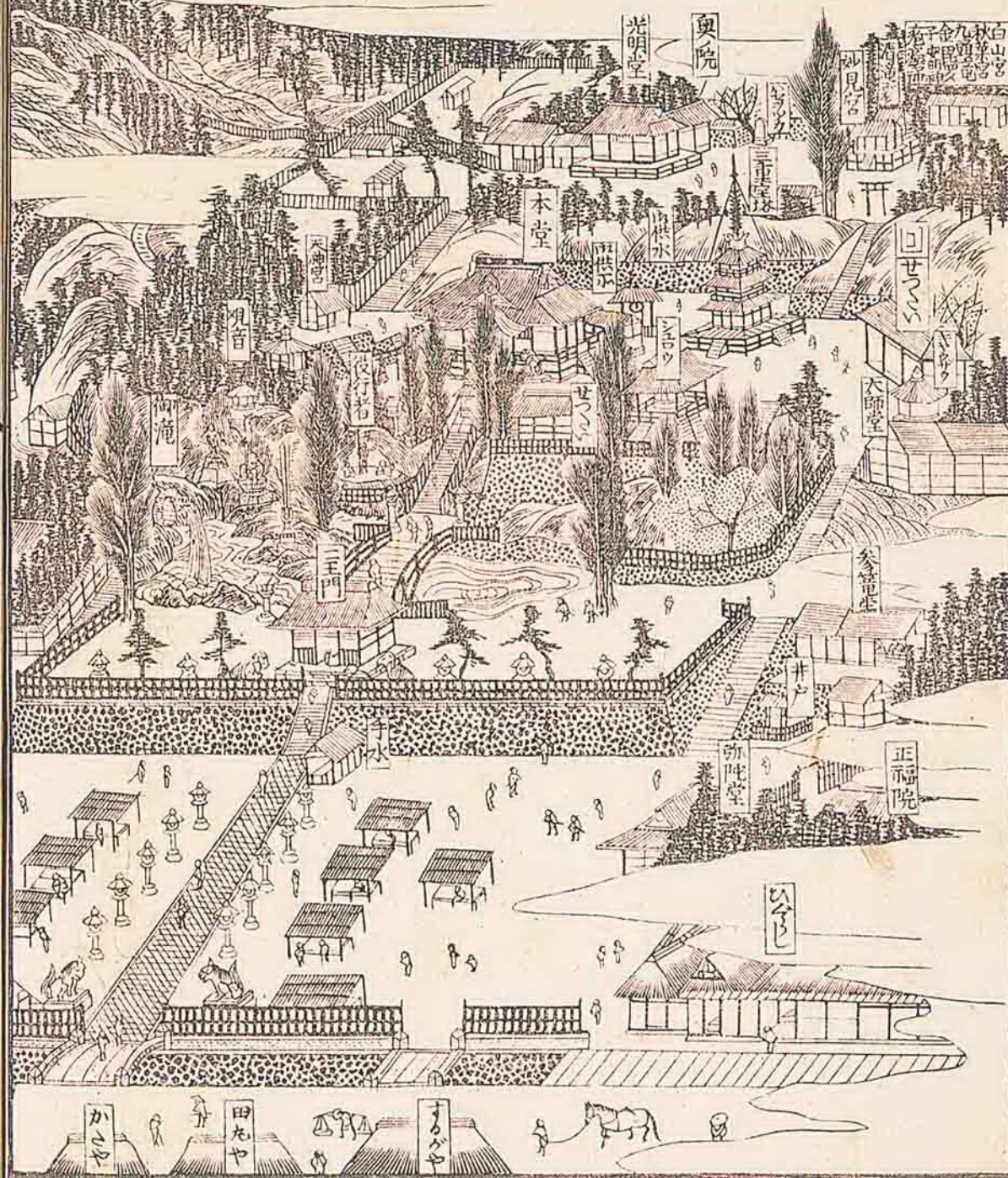
て高雄山の寺號ふ准りて神護新勝寺と號す猶縁起ふ詳あり

佐倉風土記云不動堂在成田曰神護新勝寺不動明王坐像長六

尺弘法大師所刻本爲山城國高雄護摩堂之本尊以下の文意縁起ふ同ト故ふ

畧す

成田山
神護新
勝寺
不動堂



相馬日記卷三云抑坂東ふ不動明王の古靈場三所あり相模國
大住郡の大山寺と武藏國多摩郡の高幡寺とこの新勝寺とを
り中畧今三所の中ふこよふう參詣人多うるハこの成田の靈
場あり

常總軍記卷廿二義長計畧千葉勢敗軍條云此ハ天正十三乙酉年常陸國河内郡岡見の岡見中務信貞の臣栗原下總守義長下總國海上郡高田
不於て同國佐倉千葉新介勝胤の將鳥居筑後村田兵衛荒海左衛門を破りし事
三陣の大將荒海左衛門最勇士ふて是ハ荒
手といひ慎深き者ふて酒ふも酔ハざりけるがこの軍ふ出で
しうども敵ハ潮の湧くが如く威勢強く大將鳥居村田を討ち
しかバ物とせすして荒海が勢を取込めて火水ふかれと攻
めしかバ荒海自勇を振ひ敵を數多打取りその身深手淺手十
三處ふ受けて今ハ心身疲れて岸山の谷へ轉落ち微塵ふ爲て
敵ふ首ハとりれざれども終ふ討死しりける 中畧 爰は荒海

左衛門ハ軍散じて郎等死骸を尋ねしうども曾て知れざり
る荒海ハ岸山の谷の底ふて死しるふ不思議あるうか何方
よりとも無く十六七歳の童子二人來りて荒海が死せし屍を
撫てふふ忽荒海息を吹返し蘇生せり餘ふ不思議ふ思ふ故
ふこの邊ふハ見も馴れざる最氣高き小人達あり何處何ある
所より來りせむひてかく我を憐むふふや更ふ不審晴れ
やらず御名を名のりせむへやと申しける二童子微妙の御聲
ふて我こそ成田不動明王の御使こむがうせいのう弘羅制多迦の二童子あり
汝明王を信し奉る事餘人ふ超え常ふ歩を運ふ志我が誓願せいがん豈
空からむや荒海今度軍事ふ出で深手を負ふて今既ふ死す
雖定業ふ非ず急ぎ行きて助くべしと佛勅を蒙り來りしり汝
必疑ふ事勿と仰ありて光を放ちむひて成田の方へ飛去りぬ
ひりり左衛門夢とも現とも分け難く信心肝ふ銘し御迹を伏

仰せらるふ不思議や歩行もありざる身の何とかう邊あり
木の枝も取付きて立ち一がそれより歩み出で一足づゝ運び
行きにるふきしと十三所の深手なれども苦痛も更ふ無くた
どりく道も出るか、る處も左衛門の家子堤戸平大夫牟礼
半四郎兩人いせめて左衛門殿の御死骸を犬鳥の爲ふ爲む事
も忠あきふ似たり亂軍の紛なれば若やこの谷底にて死し
ふふや尋ねべしと薜蘿を便ふ取付きて尋ねるふ左衛門ふ
巡合ひ一が手を買ひ一棧子も無く最不審あり一うバいう
る事ふやと問ひにるふ左衛門感涙やるせなく一てあかくの
由物語せり兩人も奇異の事ふ思ひ且恙あきを悦び買ひま
りせて荒海の館へ下總國埴生郡ふ在り歸りたるが左衛門ハ太刀疵鎗
創の迹ハ十三所ありくと著き一うども只凹みさるばかり
て血も更に走りず痛も無かりにるハ不思議といふも愚かり

縁起云總州生實大巖寺の開山道譽上人ハ天性愚鈍ふて學
業の進み難き事を歎き嘗てこの尊ふ歸依一參籠持念する事
百日期満する夜の夢ふ不動尊持ちぬふ利劔を吞むと見て即
覺めり覺めて後これを見れば黒き血流れて床の邊を穢せ
り然して後慧解人ふ勝れ終ふ大德智人と爲りぬふとぞ佐倉
記不動堂條云傳小弓大巖寺開山道譽自患資鈍禱請百日夢吞
明王劔血流滿床然後慧辨邁人其袈裟今猶在而血痕黯然云
祐天大僧正御傳記古岩南卷一云團通和尚祐天剃髮して日數
も過ぎその上祐天漸寺家も馴れあふへハ徐御經をも教
へばやと思召し浄土宗よて初學ふ先教ふる三部經の字數三
五字づゝ口傳ふ教へるへども中々一字も覺かぬ此の如く晝
夜教へるふ事凡五六十日ふもかりぬへども祐天いふある前
世の業因やり單の一字も覺かぬ中畧○この間祐天上人擯斥
を同寮の善長ふ諫められそれより増上寺開山堂ふ一七祐天
日断食籠を爲し靈告を得それより成田ふ赴く事を記す祐天



よく運の極小や人里離れ一野原ふて路用袈裟衣まで追剥おぎとふ剥取おぎとられ前後途方ふくれられ一この上又もいかなる憂目うれめふ逢ふとてもかゝる大事の立願をふどう無ふ爲一申さむやと少もおくる、意なく遂不成田山新勝寺別當の許へぞ着きあふ急ぎ立願の趣別當へ精く御談ありければ別當も感入かんじり籠堂へ同道あり祐天悦く思召一南無不動尊誓願空からずバ哀愍納受座して余ふ智慧を授けあへ三七日のから断食身命を盡し祈請一奉る者あり願はくは結願のタふハ勿躰たふあくと不動尊體を現しあひ直ふ智慧を授けあひ天下の名僧と爲してふびあへ祐天が胸中を明鏡を照し驗覽有て願望成就あさしめあへと祈請あるぞおそろしきの事を畧す 祐天ハ猶も丹誠を抽祈請有り程なく二七日の願境ふもかりければ旅疲といひ芝ふて開山堂へ籠り断食致されそれより直ふ復か

くの如く断食二七日ふもかる事あれば宸早御身も疲果て只生きゑる耳の有様あれども一心ハ日は勇ましく岩をも通す念力ハ畏といふも餘ありかゝる愿ふ奇やある夕方ふ年七旬とも見えける畏一氣ある姥出来り祐天くと聲をうけ汝さこそ身も疲果め宸早心願も成就せむ何不動納受ありざらむ二七日満ずれば速く國へ歸りけりへ其方途中ふて追剥ふ奪ハれ一鳥目一賀文袈裟衣まで我々取返一來れり此を持て故郷へ歸り學問出精すべしと有りければ祐天も不審晴れあハすこハ忝き御厚恩いゝある御方ふて座せばかくハ憐みあふやりむ御名慕くくかり然れども余がこの度の立願ハ懸命の念願ありて三七日のから断食是非この日數満てずバ置くべからずよしそれまでふ飢死せば本望よ必々御恤下されかと歸る氣色も見えざれば姥ハ麓へ歸りけり暫過ぎて又出来る

ハ別當の僧祐天くと聲をうけ汝漸身と疲れより最早立願成就せり天下の名僧と爲る事疑ふ事あるべからず三七日籠するふおよはずこれより直に立歸り學問出精するあらば世ふ比ふき智慧僧とあるべし早とくとの多へば祐天首を回ら一思ふる別當の仰うふ段々の御教御情ふ似れどもこの度の立願ハ命を惜み身をかはさず如き思ふる願掛ふ非ず思詰めざる事ふれば必三七日籠り眞の不動の尊體を拜し智慧を授けり終るまで中々國へハ歸るまじ御捨置下さるべし飢死ふ及ば、本望ありと血眼ふ爲ての多へば奇や今まで晴れる空卒に震動雷電して岩を碎き石を飛ばし御堂の震動たゞ事ふらず祐天少と畏れぬはず一心不乱ふ不動を念じ假令岩ふ摧れても一心の覺鬼爰ふ止まり眞の不動を拜し奉らず、バ體ハ微塵とあらばおれと怒の背裂くるが如く口ふ不動の

御名を唱へ動ずる氣色あかりける猶と奇ハ今まで別當の僧と思ひしが卒にその長一文許の不動と現れ御身より火焰を出し左右の御手ふ長短の利劍を提げ善哉く吾ハ是成田不動あり汝が丹誠無二の念力類あき事を感し今現れて示す者あり汝が前生の罪惡深き事二世三世死變生變りても盡る時あるべからず此は因て今生ふ於ても明盲とありざるあり今より智慧を授かりむと思ふあらばこの長短二劍の内一振吞て藏腑の惡血を吐出し新血を生じて生改めて智慧を授けられこの二振の中長きを吞むべきや短きを吞むべきや否や祐天慎て曰く短きを吞めても體を破りむ長きを吞めても體を破りむ何を吞めても體を破るふ二ハ無し余長きを吞まむと大口を開て待ちぬへば忝と不動尊咒を唱へぬひ右の御手の長きを情なくも祐天の口へ刺しぬへばわつと言ひて俯きその

儘息ハ絶果ふりかくて新勝寺の別當ハ夜もほのくと明れ
ければ祐天の事を不便と思ひ今頃ハ料身も疲れぬらむ二七
日を満てぬれば飢羸れて死せむと知れずいざ訪ひて事問ふ
べしと籠堂へ参られて祐天の有様を見らふ血ハ流れて體
を浸し俯伏して息断えり別當仰天し多ひしがつくくと
様子を見らひて是事ふてハ有るまじこの籠堂へ他人の
入るべき様も無し不動の爲さしめらふあらむと急夥の僧を
集め即座の護摩を焚き多し不動尊を念じて曰く祐天小僧一
念の誠心二七日満つ願はくハ祐天蘇生してこの有様を明
白分明うしとびらへとせめうけく祈りらへば不つと息をつ
きむくと起きて別當ふ向ひ只今まで數々の御芳志生々世々
忘れまじ立願成就して眞の不動の尊體を拜し智慧を授けり
ありその外劔難の次第不思議の事ども一一ふ語り多へば

一座の僧とち感ず奇異の思を爲し別當も祐天をかき撫て、
前代未聞の名僧やと感ず事限あり先御利生の實を見む
とて般若經を一度讀みて聞かせ多へば祐天これを聞取り固
より知れるが如く一字一點の差も無く語り多ふを奇あるの
書甚誤ありしを今大率正して引きとりさて同書卷四祐天上
人土浦の淨福寺にて說法あり歸るさ法華宗徒の害せむと
せしを不動尊雷雨を起して拒ぎし事をいへり今これを畧す
祐天上人の事ハ祐天大僧正傳及び三縁山志ハ精し世ハ一相
無切有居士の祐天上人一代記とて六卷あるハ戲作あり又累
女解脫の事ハ新著聞集卷五近世奇跡考卷二相馬日記卷二ふ
見えり死靈解脫物語と
相馬日記卷三云成田不動尊ふ詣くれえて、御前の町家ふ舍
りし隣ふ集まれる男女ども騒ぐう物いひうちさるるひ
て安寝せさせす夜追の馬の鈴の音耳近く聞こえ籠人らう
丑のくびぞおと言過ぐるハいさう更けぬるあるべし
不動奉納
二童子の白きとひとり難陀花
夢太

利根川圖志卷四終

利根川
山
水



